

ムッデナハッリの真実

サティヤ サイ オーガニゼーション セントラル トラストの S. S. ナーガーナンド氏がテリー・レイス・ケネディー女史に ムッデナハッリについて語る (2016年10月16日)

テリー・レイス・ケネディー女史 (以下 TRK と表記) こんにちは。

今宵は大変嬉しいことに、S. S. ナーガーナンド氏をお迎えしています。氏は上級弁護士であり、インド国プッタパルティのバガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババの帰依者であり、サイ・ババのセントラル・トラスト (中央財団) 理事を務めています。氏は、セントラル・トラストが裁判所で行っている訴訟について、今夜私たちにお話ししますと約束してくださいました。

私たちは、裁判所でムッデナハッリのシュリ・サティヤ・サイ・ローカ・セヴァ・トラストに対する訴訟が行われているところの状況を、知りたいと思っています。現在、世間の人々に知られているこの訴訟の争点をすべて理解しているわけではない人のために、この物語を起こった順に説明してほしいと、私はナーガーナンド氏にお願いしてあります。

何が起こったかと言いますと、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババ様が2011年4月24日に肉体を離れられた後、ある人物が非常に奇妙な芝居を始めたのです。その人物は、スワミの非常に近くにいた方で、スワミの残された遺産であるシュリ・サティヤ・サイ・セントラル・トラストを乗っ取るようとしています。その最大の狙いは、もちろんお金であると、私は理解しています。

ナーガーナンド氏に手伝っていただければ、私たちはより明確に理解することができることでしょう。よろしく願います、先生。

S. S. ナーガーナンド氏 (以下 SSN と表記) マハーサマーディ [ババがこの世を去った時] 後に起こった出来事をご紹介します前に、その背景をご説明する必要があると思います。1970年代のころ、マディヤラ・ナーラーヤン [ナーラーヤナ]・バットと呼ばれる紳士がおりました。バット氏は所帯を持っていましたが、非常に敬虔な生活を送っていました。バット氏は、以前はアリケーという場所で生活していました。そして、快適な家庭生活を放棄するのも厭わない青年たちのグループを結成したのです。そのグループは教育という目的のために独身生活を送っていました。これは教育が初恋の相手だったからです。それで、バット氏と彼の家族はアリケーに学校を設立するための土地を提供しました。アリケーは、南インドのカルナータカ州の西部、南カンナダ地区にある非常に小さな辺鄙 (へんぴ) な場所です。それから、バット氏はそこに学校を設立し、非常に小規模に運営していました。

バット氏の信奉者の一部はムッデナハッリに住んでいました。皆さんご存じのとおり、ムッデナハッリは、インドで最も有名なエンジニアである M. ヴィシュヴェーシュ

ヴァライヤ氏が生まれた、非常に古くからある場所です。そこで行われる教育活動がいくつかありましたので、彼らはムッデナハッリに学校を建てました。その学校は、収支の合う範囲でぎりぎりのやりくりをしていました。彼らには十分なお金がありませんでした。彼らは借金をしなければならなくなり、収入の範囲内でやっていくのは困難であることに気が付きました。しかし、ナーラーヤン・バット氏とその信奉者たちは全員がバガヴァン・ババ〔サティヤサイババ〕の帰依者で、ババを信仰していました。

不幸なことに、ナーラーヤン・バット氏は交通事故のため急死しました。悲しみと自責の念に沈んだバット氏の信奉者たちは皆、その後どのように事を進めていけばいいのか、まったく見当もつきませんでした。それで彼らはババのところへ行き、蓮華の御足の下でこう言いました。

「スワミ〔ババ〕、何が起きているかを見てください。あなたはこれから、これらの子供たちと学校の管理を引き受けなければなりません。」

スワミ〔ババ〕は、話をしたいと望んでいる人が誰であろうとも、十分に話し合ってから、マイペースでゆっくりと気長に活動を進められます。当時学校を運営していた組織は、ローカ・セヴァ・ヴルンダ（トラスト）と呼ばれるソサエティ（団体）でした。スワミ〔ババ〕は彼らに、その団体はスワミ〔ババ〕が言うことに同意するかどうか、お尋ねになりました。

後に、私は多くを知るようになるのですが、バガヴァン〔ババ〕はナラシムハ〔ナラシンハ〕・ムールティ氏とアリケーから来た数人の人々に、私の父に会うよう指示なさっていました。私の父は、私たちの州の上級弁護士会の元会長であり、バガヴァン〔ババ〕の熱心な帰依者であり、カルナータカ州のサティヤ・サイ・トラストの会員でもあった故シュリ・スンドル・スワミーです。スワミ〔ババ〕は私の父に文書の起草を依頼なさいました。ですから一見したところ、私の父がこの証書を起草し、ババがそれを承認なさり、その文書がチッカバツラブルに登記された、ということになります。

その文書には、ローカ・セヴァ・ヴルンダ（トラスト）に帰属していた資産すべてが列挙され、その管財人（理事）はバガヴァン・ババただ一人である、と規定していました。これ以降、それらのすべては、サティヤ・サイ・ローカ・セヴァ・ヴルンダ（トラスト）に帰属する、とあったのです。

バガヴァン〔ババ〕は運営委員会を制定なさいました。一つはアリケー用、もう一つはムッデナハッリ用です。そして、それぞれの委員会に委員長 1 名と秘書 1 名を指名なさいました。これらの 2 つの委員会は、学校を監督するために機能していました。そして、スワミ〔ババ〕は資金を捻出なさり、すべての債務を完全に返済することを引き受けられたのです。学校は完全に負債ゼロとなりました。ババはこの学校への支援を何とか続けていました。ババはただ一人の理事として、その学校を運営管理なさいました。

数年後、1996 年に突然私の父が亡くなりました。私は裁判所の訴訟を引き継ぎました。そのころ、スワミ〔ババ〕は非常に頻繁にバンガロールに来られたものでした。

1976 年には、スワミは私たちの家にも一度来てくださいました。スワミ〔ババ〕とのつながり、スワミの愛、スワミの祝福は続きました。

1998 年か 1999 年のある時、スワミ〔ババ〕が私にサティヤ・サイ・メディカル・トラスト（サティヤ・サイ医療財団）の理事になるよう依頼なさいました。その時以来ずっと親密な関係は続き、いくつかの理由でスワミ〔ババ〕はたくさんの愛と愛情と祝福を私たち家族に授けてくださったのです。私は後に多くの立場で関与することになりました。そして、スワミ〔ババ〕は、私と私の家族を愛し、交流してくださったものです。助言と忠告をするために、トラスト（財団）に関する業務の多くが、私に委ねられました。スワミ〔ババ〕は何度も私に依頼なさいました。

「ナーガーナンド、将来何が起こるかについて考えておくれ。」

それで、たくさん話し合いが行われ、私はバガヴァン〔ババ〕の前でたくさんの提案をさせていただきました。しかし、ババが文書を準備するようにと実際におっしゃったのは、2008 年だけでした。それで、私はババにその文書が何であるかを説明しました。その提言は、ババの死後はローカ・セヴァ・トラストの理事はサティヤ・サイ・セントラル・トラストによって任命されるべきである、というものでした。スワミ〔ババ〕はすぐにそのアイデアを承認なさいました。私は修正条項証書を用意し、それをバガヴァンにお見せしました。ババはじっくりとご覧になって、承認し、こうおっしゃいました。

「よろしい。私はあなたに法定代理人の権限を与えよう。あなたはチッカバツラブルに行って、この文書を登記してきなさい。」

それで、スワミ〔ババ〕は法定代理人の委任状に署名し、修正条項証書にも署名なさいました。修正条項証書は、バガヴァン〔ババ〕の死後、セントラル・トラストの理事がローカ・セヴァ・トラストの理事を任命する、という非常に短い、小さな修正でした。皮肉なことに、私がナーラーヤン・ラーオ氏と一緒に登記しに行ったこの修正条項証書が、その文書の証拠の一つでした。そして私はその文書に署名し、登記したのです。

ですから、2008 年から 2011 年まで、スワミ〔ババ〕は唯一の理事であり続けました。そしてマハーサマーディの時に初めて理事を任命する必要が生じたのです。マハーサマーディの数日後、セントラル・トラストの理事たちは会合を開きました。皆さんご存じのとおり、マハーサマーディの 6~8 か月前である 2010 年のグル・プールニマー祭期間中に、バガヴァン〔ババ〕は 4 名をサティヤ・サイ・セントラル・トラストの理事に任命なさいました。また、私をはじめとする数人を、運営評議会の評議員に任命なさいました。

マハーサマーディの後、理事会は会合を行い、少なくとも 3 名を任命しなければならない、という私の勧告を決議しました。それで、ガンガーダル〔ガンガーダラ〕・バット氏や他の人々と何回か話し合いが行われました。彼らは私に理事の一人になってほしいと提案しました。彼らはまた、V. R. ヴァースキ氏も理事の一人にしてほしいと言いました。ヴァースキ氏は、たくさんの資金、人材、資源を寄付していました。ヴァースキ氏は、そこにいる子供たちのために必要だった新しい建物を建設しま

した。これらの学校にとって、ヴァースキ氏は頻繁な訪問者であり、大きな資金源でした。そのため、彼らはヴァースキ氏の名前を挙げたのです。3番目に挙げた名前は、もちろんガンガーダル・バット氏でした。それでこの任命が行われ、私たちは三人だけの理事となったのです。しばらくの間は何の問題もありませんでした。万事がスムーズに進んでいました。

その後、ナラシムハ・ムールティ氏が名乗りを上げ、当時（トラストの）メンバーであり秘書であったギリ氏と面会して、自分は長年バガヴァンと交際してきたのだから、自分が理事になる必要がある、と主張しました。ムールティ氏はかなりの圧力をかけてきました。そして他の人々とも話をしました。彼は、私を含めた他の理事全員と面会しました。そして最終的に、ナラシムハ・ムールティ氏も理事となることが決議されたのです。あと1、2名の名士も理事に就任することが決議されました。その後も何の問題もありませんでした。

ナラシムハ・ムールティ氏は、当初、ローカ・セヴァ・トラストの秘書として任命されました。以前はムールティ氏が理事会を招集していました。しばらくは上手くいっていましたが、突然、私は何が起こったのかわからなくなりました。皆さんご存じのように、ムッデナハッリには一つの建物があります。そこに大学のキャンパスが計画されていた時、セントラル・トラストは施工業者としてL&T（ラーセン&トゥブロー）社と契約しました。そしてセントラル・トラストはかなりの費用をかけてその建物を建設したのです。それでこの建物は建てられました。

マハーサマーディ後、そこで祈りの会を始めて、一般の人々がそれを目当てに定期的にムッデナハッリを訪れるようになる、という動きがありました。その時点では、セントラル・トラストは、自分たちが所有する資産を自分たちで運営管理しなければならないと感じていました。そしていくつかの議論が行われたのです。表面的にはそれは、ナラシムハ・ムールティ氏とはつながっていませんでした。セントラル・トラストと決別すべきだという最初の種がナラシムハ・ムールティ氏の心の中に蒔かれたのは、このころであったらうと私は思います。

さて、ムールティ氏がこの考えを思いついた時、即座には動きませんでした。しかし私が思うには、それは非常によく計画された策略だったのです。そのころ、バンガロールにある私の事務所で、ある会議が開かれました。そこでは、行動規範やその他の事に関するたくさんの事項が話し合われました。しかし、彼らは理事の変更に関する問題は一切取り上げませんでした。なぜならば、明らかに私が、そのような協定に同意しないであろうからです。

TRK ナラシムハ・ムールティ氏が手紙を書いて、全世界にメールで送り始めたのは、この時点ですか？ それは偶然に同時期に発生した出来事ですか？ それともまだ起こっていなかったのですか？

SSN それはまだ始まっていませんでした。なぜなら、彼らを取りたかった第一段階は、ローカ・セヴァ・トラストに対するセントラル・トラストの管理権限を確実に破壊することだったからです。彼らは、セントラル・トラストの管理下から抜け出したかったのです。

TRK 彼らはどのようにしてそれを行ったのでしょうか？

SSN 彼らは、何の話し合いも、理事たちの同意もなく、前夜に私たちが会議を行ったその翌朝、彼ら三人が、チックバッラプルの副登記官事務所へ赴いて、スワミ〔ババ〕がなされたことを修正し、セントラル・トラストに理事を任命する権限が授けられたという条項を削除する文書を提出したのです。

TRK ババの実際の言葉を彼らに変更してしまった、とあなたはおっしゃっているのですか？

SSN そのとおりです。

TRK 言葉を変更したのは、三人のうちの誰なのでしょうか？

SSN その文書に署名したのは次の三人です。

①ナラシムハ〔ナラシンハ〕・ムールティ氏

②ガンガーダル・バット氏

③ナーラーヤン〔ナーラーヤナ〕・ラーオ氏

TRK 彼らは自力でこの文書を作成したのですか？ それとも弁護士の手助けを借りたのでしょうか？

SSN 彼らは弁護士の助けを借りたと、私は確信しています。なぜなら、その前夜に会議が行われ、その会議は午後 8 時ごろに終わったからです。駅に行かなければならなかったのですが、私は先に帰りました。その翌朝、午前 10 時 30 分に、彼ら全員がチックバッラプルの副登記官事務所において、登記文書と、印紙を貼った書類のすべてを揃えて、登記の準備を整えていたのです。実際に文書を登記した副登記官は、私に関しても、もう一人の理事であったヴァースキ氏についても、何も知りませんでした。このことが露見した時、私たちはその文書のコピーを入手しました。ヴァースキ氏は大変憤慨し、ないがしろにされたと感じました。それでヴァースキ氏は怒って辞任しました。

「自分はこんな人たちの仲間であってはいけない」とヴァースキ氏は言いました。

そしてそれが始まりだったのです。彼らが行った修正は、セントラル・トラストに与えられていた任命権限が取り上げられて、(ローカ・セヴァ・トラストの) 理事会そのものにその権限が与えられる、というものでした。つまり彼らは権力を得たのです。

TRK 副登記官事務に来た時、彼らはどのようにして自分たちの身分証明をしたのでしょうか？ 私は誰それです、と説明する時に、何らかの手続きをすべきではないのでしょうか？

SSN 彼らは自分たちの身分証明書と、以前に登記した文書と、セントラル・トラストがこれらの紳士たちを理事として任命したという文書を提出したようです。そして、それらが、これらの人々はローカ・セヴァ・トラストの理事であることを示す証拠書類となったのです。彼らが副登記官のもとへ行った時、彼らは 3 名分の署名だけ

がある書類を提出しました。おそらく彼らは、賛成か反対の票を投じた他の理事がいたことを副登記官には告げなかったのです。副登記官は言いました。

「理事たちが来る必要があります。あなた方は理事ですね。」

それで副登記官はそれを登記しました。これが露見したのは、分裂が始まった時でした。ナラシムハ・ムールティ氏が地位を得たことが明らかになると、彼は私にあらゆる通知を送ることを停止しました。

TRK その日付はおわかりですか？

SSN 私の記憶が正しければ、それは2012年9月12日であったと思います。およそ1年間は、物事は上手くいっていました。それからこの問題が起こり、彼らは独自の道を走り始めたのです。その時まで、マドゥスーダン・ナイドゥ氏は影の薄い存在でした。誰一人として彼のことを聞いたことがありませんでした。私はそれまでの人生で彼に会ったことがありませんでした。私がほとんど毎週プッタパーティに通っていたにもかかわらずです。

TRK さて、マドゥスーダン・ナイドゥ氏は、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババから直接彼のもとに来るメッセージを伝えていると称する人物です。私たちは、その時まで、彼のことを聞いたことがありませんでした。

SSN そのとおりです。その時まで、私はマドゥスーダン・ナイドゥ氏のことを聞いたこともなかったのです。彼はどの写真にも写っていませんでした。そして、彼が何年も前に（サイ大学の）学生であったことを私は知りました。私は頻繁に〔プッタパーティを〕訪れていたので、オーガニゼーションやアシュラムで何らかの役割を果たしている学生たちのほとんど全員と面識がありました。〔しかし〕私はこの紳士〔マドゥスーダン・ナイドゥ氏〕のことは一度も見たことはありませんでした。私は彼について何も知らず、彼とは何の交流もありませんでした。しかし、この文書が登記された数か月後に起こったことは、ナラシムハ・ムールティ氏が非常に野心的になり、世界中を回って、あらゆる場所にメールを書き、マドゥスーダン・ナイドゥ氏が一種の霊媒師としてバガヴァン・ババとつながっていることを提唱し始めたということです。

この分裂が始まる直前のある日、ナラシムハ・ムールティ氏が私のところに来て、

「先生、ババが私に指示をくれるのですよ」と言いました。

私は非常に長い間、ババの帰依者でした。私の人生すべてがババです。私は、ババから与えられた指示や決定を実行に移す立場にありました。彼は言いました。

「私は、学校を建てなければならない、という指示を受けています。私は、これこれしかじかの場所へ行くようにと指示を受けています。そして土地が入手可能になりました。誰かが来て、あなたにお金を寄付するでしょう。そうしたらあなたはそこで学校を始めるのです。あなたは私の邪魔をしないでください。」

それで私は彼に言いました。

「なぜ私があなただの邪魔をするんですか？ なぜ誰かがあなただの邪魔をするんですか？ もし良い仕事をしているのであれば、あなたにはそれができるはずです。しかし、マハーサーディ後、ババから指示が与えられているということについては、あなたはもう少し慎重になるべきですね。あなたがこれらのことを証明できるのかどうか、私にもわかりません。もしあなたが、『私は電話を取るだけでババと話ができます』と言い続けたら、世の中の人はいあなたのことをどう思うでしょう。」

その時、マドゥスーダン・ナイドゥ氏の名は私に告げられませんでした。マドゥスーダン・ナイドゥ氏が表に現れてくるのはもっと後のことです。しかし、彼はナラシムハ・ムールティ氏によって前に座らされている人のように見えました。これができる人というのは、私は彼の力がどんなものであるかは知らないのですが、皆さんご存じのように、彼はネックレスを物質化し、ババが与えていらしたように人々にプレゼントを与えています。マドゥスーダン・ナイドゥ氏は今や、かつてスワミがなさっていたように、人々の間を歩き回って手紙を受け取っています。これらが、かなりの量の心配事、いわば不信感をもたらしている物事のすべてです。しかし、最も重要なことは、私が直接、

「私は誰かが私に言ったことを話しているのではない」

と〔マドゥスーダン・ナイドゥ氏が言ったのを〕聞いたことです。彼らはある人物の家に行き、その人の妻と接触しました。そして、

「スワミがメッセージを送っています。ここにあなたへのサリーがあります」と言いました。夫は言いました。

「ババは私たちに十分与えてくださった。私は、ババが私たちにサリーを送ろうとしているとは思わない。私の妻はこのサリーを必要としていない。ですから、ここから立ち去ってください。そして、こんな作り話をしないでください。私はあなた方に付いて行くつもりはありません。」

私はこの紳士と個人的に面会しました。プネーにある彼の自宅で彼に会いました。彼は立派な帰依者でした。

皆さんは、いつもバガヴァン〔ババ〕とアクセスし、バガヴァンが布林ダーヴァンに滞在されている間はすぐそばにいた、シュリ・シュリーニヴァス氏とナラシムハ・ムールティ氏の二人をご存じですね。スワミ〔ババ〕が布林ダーヴァンに3~4か月滞在なさっていたころは、そしてまたスワミがコダイカーナルやウーティーに学生たちと一緒に旅行された時には、いつもスワミは寮監〔ナラシムハ・ムールティ氏〕を同行させていました。学生たちを監督し、学生たちがどのように身を処すかを見守るためです。以前の彼は、厳格な人物でした。これらの旅の多くは、ナラシムハ・ムールティ氏がババに同行していました。ですから、彼らはこれらの機会に、誰がスワミのもとを訪れ、誰がスワミにお金を寄付しているのかを詳しく知ったのです。スワミが御存命の間は、寄付についての情報や、誰が寄付しているか、どのように寄付が行われたかは、一切誰にも知らされませんでした。それは完全に、ババご自身が個人的にご存じであるだけでした。それから、口座を管理するごく数名だけがそれを知っていました。理事でさえもそれを知る機会はありませんでした。私でさえもそれ

を知らなかったのです。しかし、ババの近くにいたこの二人の紳士は、それに気付き、注意深く観察して、メモを取っていたのです。二人はすべての寄付者について、誰が来たか、誰がバガヴァンに帰依しているか、誰が寄付をしたかをメモしていました。そして二人は、その人々に狙いをつけ、電話をかけ、

「スワミは、あなたが 250 万ルピー（約 430 万円）の寄付をすることになっていると告げるために、私たちにあなたのもとへ行くよう指示されました。」

と言って、要求を始めたのです。

TRK ところで先生、あなたはマハーサマーディ後のことを話されていますね。しかし、コダイカーナルでスワミがお元気だったころ、二人はすでに誰が寄付をしたかの記録を取っていたのですか？ ということは、二人は当時から金銭に関心があったのでしょうか？

SSN 私はこのように見えています。私が起こったと考えていることは、（セントラル）トラストへのドナー（寄付者）と、バガヴァンの帰依者である人々に関するたくさんの情報に、これらの人々がアクセスしたということです。二人はその情報を保存しました。そして今、二人は、その人々のところへ行って、こう言うことによって、その情報を悪用しています。

「あなたはスワミ〔ババ〕の帰依者ですね？ スワミから伝言があります。」

お名前は明かせないのですが、非常に大きな金額を寄付されたドナーがおられます。彼とその妻は帰依者です。私は、その方がある実業家だと聞いています。私は、二人が彼のところへ行ったと聞いています。彼は今では寄付者で、お金を寄付し続けています。彼は、

「彼らは善いことをしています。彼らは学校を設立しています。ですから、私はその学校のために寄付をする必要があると思うのです」と言います。

もちろん、もし誰かがお金を寄付したいと思い、それがその人のお金である場合、セントラル・トラストは、「私たちはそれについて何も言うつもりはありません」と言います。しかし問題は、「彼らがスワミ〔ババ〕を悪用している」ということです。

もう一つ、大きな誤用があります。彼らは、スワミの学校や病院すべてを使って、彼ら自身の学校や病院として告知しているのです。皆さんは、彼らが行っている医療支援活動は、スワミによって行われていると彼らが主張しているのをご存じでしょう。

そして、皆さんご存じのとおり、シュリーニヴァス氏は、非常に長い間、マハーサマーディの前でさえも、（セントラル）トラストにおいて何の役職にも就いていませんでしたが、彼らはそのことには触れていません。スワミがシュリーニヴァス氏を遠ざけるようになった原因となる問題がいくつかありました。私たちは皆、それを知っています。

マハーサマーディの後には、シュリーニヴァス氏が何を言おうとも、シュリーニヴァス氏を敬遠する人はいなくなりました。実際、私は数日前に、ムンバイから来た映画関係者に会いました。彼女は言いました。

「ご存じですか？ ババの秘書が来ましたよ」

それでその名前はと聞きましたら、彼女は思い出せませんでした。彼は以前ブリンダーヴァンにいて、私たちと話をしたことがあると、彼女は言っています。ですから、シュリーニヴァス氏は現在あらゆるコネクションを使って、これらの人々のもとへ行っているという状況なのです。そして、おわかりとは思いますが、そのドナーの一人はライプルの病院に寄付をしたと、私は理解しています。その紳士はキショールさんと呼ばれていました。キショール氏はスワミ〔ババ〕のトラストのドナーです。カナダにもう一人、キショールと呼ばれている紳士がいます。彼もまた寄付をしたことがわかっています。

現在、セントラル・トラストへの裕福なドナーは全員、彼らのレーダーの中にいます。彼らはそこに近づいて、こう言います。

「親愛なるスワミ、マドゥスーダン・ナイドゥがあなたとお話しします。あなたは、自分が言いたいことを私たちに言ってください。彼は、あたかもスワミがあなたのために肉体をもってそこにおられるかのように、あなたに答えを与えてくれます。」

TRK わかりました。セントラル・トラストは、このすべてをご存じなんですね。先生、あなたから聞いたこの情報が、人々に知らされるまでに、こんなに長い時間がかかったのはなぜなのでしょう？ もし知っていたのであれば、なぜ（セントラル）トラストは何らかの自身の声明を発表したり、あなたがしているように、状況を明確に述べたりしなかったのでしょうか？ なぜ躊躇するのでしょうか？ 彼らが躊躇していた理由があるのですか？

ババが住居として与えた〔プラシャーンティ ニラヤムの〕二区画のアパートに住んでいたアイザック・タイグレット氏が、完全にムッデナハッリに行きそうになった時でさえも、私が知るところでは、アイザック・タイグレット氏自身が、「自分が去るのは自分の意志であり、自分はセントラル・トラストの良き友人である」と述べた大きな告示をガネーシャゲートの前に掲示しても、彼ら（セントラル・トラスト）はタイグレット氏に出て行くようにとは求めませんでした。これが、帰依者である私たちの多くを戸惑わせています。私たちのほとんどは小さな人々で、部外者なのです。

SSN 本当に起こったことは、こうでした。彼らがこの違法な変更を行った直後、もう一つのことが行われたのです。ご存じのように、インドゥラル・シャー氏は老人性痴呆になってしまいました。シャー氏は、セントラル・トラストにおける最年長の理事でした。かつては、シャー氏が理事会のすべての会議の議長を務めていました。そして彼らはこの状況を利用しようと考えたのです。

TRK ムッデナハッリが、ですか？

SSN はい。ナラシムハ・ムールティ氏とその他の人々です。私が推量するに、シャー氏の娘と義理の息子を通じて、彼らは何らかの形で、ムッデナハッリで行われる彼らの行事すべてに参加するよう、シャー氏を説き伏せたのです。実際、インドゥラル・シャー氏はプッタパルティに来るのをやめ、ムッデナハッリで行われるすべての行事に参加し始めました。

さて、それで、彼らといきなり裁判で戦うのではなく、私たちは彼らと話をすべきだという決定がなされました。私たちは彼らに、彼らがやっていることは正しいことではない、ということ気付かせるべきだということになりました。それで、二年以上かけて、今から思えば長い期間ですが、私たちは何回もミーティングをしました。私たちは彼ら全員を招集しました。彼らと個別に話をしました。彼ら全員を集めて話をしました。インドゥラル・シャー氏自身が出席している会議で、彼らに話をしました。そして、私たちは彼らに、あなた方がやっていることは正しいことではありませんと言いました。私たちが彼らに言ったことすべては、それを見守り、世話をしましょうということでした。

「このトラストはスワミ [ババ] のトラストです。スワミは、1978 年からマハーサーマーディまで、トラストの面倒を見てこられました。あなた方は、自分は今もうトラストとは関係ない、とどうして言えるのですか？」

そして彼らがよこした答えは、私たちは他の人々と議論する必要はありません、というものでした。彼らは、「自分たちはティヤーガジューヴィ (放棄した個我) である」と自称しました。どんなティヤーガ (放棄) を彼らがしたのか、私にはわかりません。ティヤーガジューヴィとは、自分の執着すべてを手放した人のことです。もし理事としての地位に大いにこだわるあまり、不法な書類を作って、偽の議事録を提出するのであれば、どんなティヤーガ (放棄) をしたというのでしょうか。ティヤーガではありません。それで、私たちは彼らを納得させようと思いました。最終的に、彼らは、戻ってくることに合意しました。その時私たちはこう言いました。

「私たちが書類を修正します。あなた方はそれを持ち帰ってください。」

それから私たちは言いました。

「いいですか。これらの学校はバガヴァンが運営し、バガヴァンが育てたのです。仮にもし、あなた方が助けを必要としていて、私たちがあなた方に援助の手を差し伸べることができるのであれば、セントラル・トラストは学校に不利になるようなことは一切しないつもりです。しかし、それ以外でも、私たちは学校に害を及ぼすつもりは全くありません。」

彼らは聞きませんでした。それで、

「あなた方は修正条項証書をくれますか？」 (と聞きました。)

彼らは、まったく無意味なものを配ってきました。それで、この話し合いは続きました。最後に、私たち理事は、もう一通手紙を書くべきだと感じました。それで、もう一通の長い手紙を [セントラル・トラストの] チャクラヴァルティ氏が書きました。それに対しては何の反応も返事もありませんでした。

それで、最終的に、私たちが訴訟を起こす出訴期限は三年間でしたので、その三年目が終わる直前に、私たちは告訴することを決定しました。それにはちょっとした問題がありました。なぜなら当時インドゥラル・シャー氏が (セントラル・トラストの) 理事の一員だったからです。シャー氏が告訴に同意しないことは明らかでした。それで、私たちはシャー氏を訴訟の被告人にして、シャー氏をナラシムハ・ムール

ティ氏とその仲間たちの仲間としなければなりません。ギリ氏はその訴訟に参加しましたが、彼は病気のため非常に弱っており、完全な良好な健康状態ではありませんでした。そのようにして彼は加わりました。それが三年目のことでした。それだけです。他には何もありません。

もう一つの質問、「なぜこのことが公表されなかったのか？」ということですが、おわかりのように、私たち全員が抱いていた最も大きな懸念は、どのようにしてスワミ [ババ] の御名と神性さを守り保護するか、ということでした。誰かに対して申し立てをして、報道機関に公表することは、私たちにとって簡単なことです。しかし、メディアがどのように物事を見るか、これらの申し立てについてメディアが何を言おうとするか、それはバガヴァンの御名と栄光に反映されるだろうか？ を考えなくてはなりません。セントラル・トラストにいる人々の意識の中では、常にこれが最優先事項だったのです。法律家として、私は述べようと思いました。いいですか。もし何か間違っていることが起こったら、人々に「それは間違いです」と言うのが私たちの義務でありダルマなのです。

そして、申し上げなければならないのは、私はこれらのことを何回も何回も人々に伝えてきたということです。私が国外に何度も行って行った講演のいくつかは、インターネット上で動画公開されています。私はこの件について話してきました。私は説明してきました。今あなたにこうやって説明しているように。

これが何が起こったかという顛末です。しかし残念なことに、この訴訟は、何と云いましょうか、無駄に終わりました。ローカ・セヴァ・トラストが、厳密な法解釈の申立書を提出して、この訴訟は、トラストに関係したものなので、別の管轄地域にある民事裁判所 (civil judge) ではなく、地方裁判所 (district judge) に提訴すべきであると申し立てました。それが彼らが書面で申し立てた異議です。私たちの法律顧問や最高裁判所の判決は、この異議は支持されないものであることを完璧に示しています。私たちの上級法廷弁護士が議論し、法を指摘しましたが、残念なことに、その裁判官は私たちに不利な裁定を下し、この訴訟は地方裁判所に提訴すべきであったと述べました。私には納得できません。

TRK その裁判官の名前はわかりますか？

SSN 名前は忘れました。チックバッラプルにいる女性の裁判官です。

TRK それで、その女性の裁判官が訴状を読むまでに、どれくらい時間がかかったのですか？ 1年と2~3か月くらいですか？

SSN 訴訟制度がどのように機能しているかといいますと、まず裁判所に書類を提出します。その書類は訴訟記録の中にただ置かれています。そして争点の準備が整ったら、口頭審理が行われます。その時に、裁判官が書類を受け取り、それを読み、弁論を審理し、命令を申し渡します。

TRK それでその訴訟の口頭審理は行われたのですか？

SSN ええ。命令を書いたこの1名の判事が、本件は却下すべきであるという彼らが申し立てた申請書について口頭審理を行いました。

TRK その女性の裁判官はその訴訟を実際に口頭審理したのですね。

SSN そうです。彼女が実際の口頭審理を行いました。彼女が申請書を審理し、私たちの異議を審理し、双方の弁護士の弁論を審理しました。それから彼女は少し時間を取りました。それから彼女は、この案件は、誤った裁判所に提訴されているので、ここで審理継続することはできないという決定を下しました。

TRK 彼女は弁護士だったのですか？

SSN ほとんどの裁判官は、彼らが裁判官になる前は弁護士です。ですから彼女もそうだったのかもしれませんが。彼女はおそらくキャリア 5~10 年くらいの若手判事です。私たちは、その命令は法に沿っていないという助言をもらいました。それで私たちはその命令に上訴する異議申し立てをすることに決めました。非常に急いでそれに取り掛かるつもりです。

TRK その上告は、チックバツラプルの民事裁判所で審議継続してほしいというものですか？

SSN そのとおりです。管轄について、私は少しご説明できますが、私たちが行った申請は非常に単純な物でした。私たちの主張はこうでした。この修正は 2012 年 9 月 12 日になされたとあるけれども、その修正は違法（無効）である。なぜなら、すべての理事がそれを承認していないし、そもそも私たちにはそのような修正を行ったり、与えられた権限を取り上げたりすることはできない。バガヴァン [ババ] からセントラル・トラストに与えられた神聖な権限を、そのように取り上げることはできない。それが私たちの主張でした。ですから、私たちの見解では、そして 私たちの上級法廷弁護士の助言によれば、私たちが取ったこの手続きは正しいものでした。しかし、おわかりのように、裁判所という序列の中では、裁判所が判断するのです。そしてそれは、控訴裁判所で審議されなければなりません。そして、それがまさしく、今日の時点で、私たちが行おうとしていることなのです。上告の申し立てはまだです。しかし。

TRK 上告の期限があるはずですね。

SSN 数日中に申し立てを行う予定であると信じています。

TRK あなたは、ご自分がシュリ・サティヤ・サイ・ババ・セントラル・トラストの弁護士と顧問であると話していますね。別の弁護士がいることは知りませんでした。

SSN 実は、そうですね。そここのところは明確にしておくべきですね。私が知っている限りでは、セントラル・トラストの問題に関してスワミの相談に乗っていた唯一の弁護士は、私でした。しかし、事件が法廷に持ち込まれると、理事として、私は当事者の一人ということになります。私たちには理事全員の代理人となる人物が必要になります。そして、理事である私は、これらの手続きに弁護士として出廷することはできないのです。そのため、私たちは法廷弁護士を雇わなければならなくなり、雇いました。二人の大ベテランの弁護士がいます。二人はスワミの帰依者です。実はその一人は、K.G.ラガヴァン氏です。彼の父親は高等裁判所の裁判官で、何年もの間ババの帰依者であった K.R.ゴーピー ヴァッラバイ判事です。ラガヴァンは上級弁

護士です。もう一人は、B.M.シャーム・プラサードです。彼もまた著名な優秀な民事（訴訟）弁護士です。そしてまた、この紳士の父親も高等裁判所の裁判官であるマリカルジュン判事です。この両者が、この訴訟の代理人としてセントラル・トラストが雇った人物です。

TRK 先生、はっきりさせておきたいことがあります。私は手に入る文書すべてに目を通しています。現在、プッタパルティのセントラル・トラストの実際の理事会メンバーは、あなた以外には誰がいるのですか？

SSN 現在は七人の理事がいます。最も年長者はT. K. K. バグワット氏、それから、V. シュリーニヴァーサン氏、K. チャクラヴァルティ氏、ヴィジヤイ・ケルカール博士、A. P. ミシュラ判事、私、そして、ラトナーカル氏です。この七人が理事の役職に就いています。

TRK 何かをセントラル・トラストの決議とするためには、理事全員が賛成しなければならない、というのは本当ですか？ それとも噂ですか？

SSN 実は、マハーサマーディ以降ずっと、すべての決議は、理事会の満場一致で決まっています。ですから、一人もしくはそれ以上の理事が、自分は賛成しないとか私は反対であると発言する機会は、これまでなかったのです。たくさん話し合い、議論が行われ、さまざまな見解が表明されました。訴訟手続きが続けられるように、何かを再び審議する必要があると、思う人もいるかもしれません。今までのところ、バガヴァン〔ババ〕の恩寵のおかげで、私たちはすべての決議を満場一致で行っております。

TRK 私たちが直接トラストから最新ニュースを得られるようにとは考えませんか？ ラジオ・サイやアシュラムの中から。世界中から集まった私たち帰依者は、ほんのわずかなニュースを得るにも大変苦労しています。ごく少数の人々だけがニュースを得ています。これに対して、ムッデナハッリは大量のジャーナリストと不適格なライターを雇って、あらゆる種類の物事を行っています。これに対して私たちは、もちろん私たちにはババの真実がありますが、すでに終わっている物事を伝えるのを、何が躊躇させているのですか？ 現在進行している物事については公表できないということは理解できます。けれども、私たちには権利があると、私は思うのです。小さな人々ですが、私たちには何が私たちに起こっているのかを知る権利があると。私たちは知りたいのです。私たちはニュースを得たい。さもなくば、私たちは信頼のおけないソーシャルメディアに頼らなければならないのでしょうか？ ほんの小さな声明でいいのです。これこれの日に私たちは法廷に行った、これこれの日に私たちの上告が受理された、そしてこれが現在私たちがいる立場である、等々。それでいいのです。大きな記事は要りません。

SSN 私たちは広報宣伝を望むべきではないと、私は常に信じてきましたし、信じ続けています。しかし私たちは、情報を伏せておくべきではありません。これは私の個人的見解です。今でもなお、私は、私たちが今以上に情報公開をしなくなれば、もっと多くのうわさが飛び交うようになるだろう、と主張しています。そして少なくとも私たちのウェブサイトとサナータナ・サーラティ誌には公表することが私たちに

とって重要であると、私は信じています。そして、訴訟手続きが始まったら、私は皆さんに、手続きが始まったと言わなくてはなりません。スワミの祝福があれば、私たちは情報のやり取りや連絡の方法を変えることができるはずだと、私は確信しています。

皆さんご存じのとおり、ムッデハナッリの広報メディアを操作している大きな組織があるということについては、私は完全に皆さんに同意します。皆さんも、スワミのご存命中、すべての連絡はスワミによってなされていたことを理解しているはずです。私がそこに行っていた非常に長い年月の間、セントラル・トラストの事務所に行って「ええと、ご存じのとおり、私は理事です。私はいくつかの情報を必要としています。教えてくださいませんか？」などと言う機会はまったくありませんでした。このような機会がなかったのは、その情報はスワミがお持ちで、もしスワミが私にその情報を知らせたいと思われた場合には、スワミが自ら私に教えてくださったからです。スワミがそれを私に伝えるでしょう。つまり、これが（当時の状況が）どうであったかということです。すべてがスワミ中心でした。それが急になくなってしまったので、周りにいる人々も、私たちが誰に何を伝えるべきなのか、非常に迷っているのです。

TRK この機会があるうちに、私はトラストにもお礼を申し上げたいです。私は、私たちのトラストに大きな信頼（トラスト）を寄せています。私はただシェアすることへの躊躇や消極性を徐々に感じています。私たちはただ、何が起きているかを知りたいだけなのです。なぜラジオ・サイでリンクが作られていないのか、私にはまったくわかりません。なぜならそれは完璧な場だからです。私にはまったくわかりません。

SSN もしできれば、私たちは、定期的に情報を伝えることができる、ある種のニュース速報かプレスリリースのようなものを始められないかと考えています。

TRK サナータナ・サーラティ誌も最適な場ですね。

SSN しかし、ご存じのとおり、私は、良いニュースとしてこれを終わらせたいのです。その良いニュースとは、もし皆さんが過去五年半の間に何が起こったのかを評価するならば、アシュラムはよく維持管理され、訪れる人々のタイプは少し変わりましたが、従来のリピーターと比較して、初めて訪れた人、再び訪れた人の数は増えているということです。初めて来るといふ人々をたくさん見るようになっています。何世代にもわたって帰依者であった人々がいます。スワミ〔ババ〕が彼らを招かれているのです。スワミが彼らを引き付けているのです。そしてアシュラムに来て新しいタイプの若い人々やその他の人々がいます。

かつてそうであったように、アシュラムは新しく、清潔になりました。病院は見事に運営されています。アメリカからの帰依者たちのおかげで、プッタパルティのジェネラル ホスピタル〔総合病院〕に新しい建物ができました。私たちはまた、素晴らしい恵みの水拡大プロジェクトを完了し、政府に引き渡しました。私たちは、スワミ〔ババ〕がムッデナハッリで発表なさった新しい大学キャンパス〔ムッデナハッリにはババの学校とナラシムハ・ムールティ氏らの運営する学校の両方が存在する〕を完成させました。新しい研究センターが稼働し始めました。それは速いペースで進み、

最終段階にあります。上手くいけば、この5～6か月のうちに、すべての設備が揃います。研究センターは、私たちの大学に帰属して、学際的な研究を行う、国の人文科学研究センターとなるでしょう。それは具体化し、活動を始めようとしています。2つの特別専門病院の設備はすべてアップグレードされて、最新の設備が届きました。

そして、私たちは、アシュラムに来て、たくさんの仕事をこなしてくれるセヴァダルたちにも、愛と愛情を与え続けています。全インド オーガニゼーションは、新しい全インド会長のニミシャ・パンディヤ氏の下で活気づいています。パンディヤ氏は皆さんがおっしゃっていることからヒントを得て、たくさんの新しい試みに取り組んでいます。すでにパンディヤ氏は、現在の状況に関する情報を発信するコミュニケーションセンターを設立しました。彼らはメディアと交流し、メディアはリシケシュ・パドゥカー・プログラムを放送しています。これは全国メディアのすべてで広く放送されました。それは素晴らしいプログラムで、多くの注目を集めました。彼らは現在、首相が発表したスワッチ・バーラト・プログラム（クリーン・インドア）に取り組んでいます。ですから、万事が素晴らしいやり方で進んでいるということをお知らせしているのです。もちろん、常に改善する余地はあります。ご存じのとおり、完璧なものは何一つありません。私たちは人間なのです。スワミは完璧です。しかし私たちはスワミを模範とすべきです。ですから、私は全員がそれを目指して努力しているのだと思っています。

しかし、ご存じのとおり、異常事態が起こっています。ムッデナハッリは異常事態です。今日、明日、いつか、スワミ〔ババ〕の時代に、人々は気付くでしょう。つまり、帰依者を目当てとしたこの種の惑わしが、多くの人々を連れて行くようなものではない、ということに。活動は上手く行っています。ご存じのように、私たちにはおおよそ数千万ルピーが必要なのですが、それは問題ではありません。問題は、私たちにとって信じがたい種類の物事を信じ込むように、帰依者たちが操られているということです。しかし、あなたもご存じのように、非常に古くからのバガヴァンの忠実な帰依者たちは、個人的には私も、ここに一人の紳士〔仲介者〕がいるということを感じることは非常に難しいことです。たとえスワミが肉体をもって私たちと一緒におられた時であっても。

そして、多くの人々、多くの年長者の人々、裁判官たちは、「私は状況を理解しています」と私のところに来て言います。

「私は何も期待していません。私はただそこ〔プラシャーンティ ニラヤム〕に行ってダルシャンを受けただけなのです。私はどこに座ろうが気にしません」——これが、私たちがバガヴァン〔ババ〕と持っていた交流のレベルでした。バガヴァンが肉体を持って私たちの前におられたころ、いつでも誰かが電話を取ればスワミ〔ババ〕と話をすることができるなんて、想像できるでしょうか？ 私にとってそれを感じることは困難です。

TRK 先生はとても魅力的で親切な方ですね。改めて、本日は長い時間ありがとうございました。この映像をご覧になってくださっている皆様にも感謝申し上げます。別の機会に、もっと多くのことをお知らせするために、皆さんとお会いできることを楽しみにしております。ジャイサイラム。